ひらどだい

令和３年度　学校だより　５月号　横浜市立平戸台小学校学校長　　藤巻　孝之

背伸び

校　長　藤巻　孝之

先日の授業参観・懇談会にはたくさんの保護者の皆様にご来校いただきました。誠にありがとうございました。嬉し恥ずかしの表情を見せる子、張り切って挙手をして発言する子、緊張していつもの調子を出し切れなかった子。さまざまな姿を見せていた子どもたちですが、どの子も見守られていることを嬉しく思っていたに違いありません。また、懇談会では担任をはじめとする各職員からの話に加え、保護者の皆様からもお言葉をいただき、充実した時間を送ることができました。現在は家庭訪問期間中であり、お子様の様子について、また今後の指導、支援について共有する時間も作っていただきました。毎年恒例の取組ではありますが、学校と家庭が連携・協働しながら、ともに子どもたちをはぐくむための、なくてはならない貴重な機会です。皆様のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

日頃、校内を見回りながら子どもたちの学習の様子を見ているのですが、授業参観の時と同様、子どもたちはさまざまな姿を見せています。取組姿勢や学習意欲に違いを感じることも少なくありません。教科や内容によって得手不得手、好き嫌いこそありますが、子どもたちの学習意欲に差が生じる理由はそれだけではなさそうです。そこで次のような場面を想定してみました。

「子どもが棚の上のお菓子を取ろうとしています。懸命に背伸びをしますが届きません。さて、どうしましょうか？」
①　そのまま見守る。応援する。　②子どもの代わりにお菓子を取る。　③踏み台を用意する。

時と場によって違いはありますが、学習場面において、学校では③を選択することが多くあります。それも楽に手の届く高い踏み台ではなく、背伸びをしてちょうど届く程度の高さの踏み台です。つまり、課題の解決に向かっている子どもたちができる限り自力解決できるように支援をしたいのです。まさに学びのチャンスなのです。学習内容や学年によって支援の方法は変わりますが、安易に「答えを伝える」「代わりにやる」では子どもたちのチャレンジを引き出し、自信をチャージすることはできません。

さらに重要なことは、背伸びをすればしっかり届くところに課題（めあて）を設定することです。いくらがんばっても自分の力では届かないと子どもたちが感じてしまっては、学びは続きません。また、簡単に手が届いてしまっては興味を示さなくなったり、知的好奇心を湧き立たせることができなかったりします。すでに獲得している力を発揮し、自力で「できた」「わかった」と成就感や達成感、成功体験を重ねていく支援ができるよう、努めていきたいと思います。

時間がかかることもあります。しかし、その時間も子どもたちには何物にも代えがたい学びの瞬間です。子どもたちの力に応じた課題解決学習、子どもたちの力が伸びるめあての設定を、日々仕掛けていきたいと思います。